

田村義也の履歴書

田村 明

出生、関東大震災

田村義也の生まれたのは、一九二三年（大正十二）四月五日、東京の信濃町にある慶応大学の付属病院だった。父は田村幸太郎、母は忠子の次男である。忠子は若いときにアメリカ人から教育を受けた新たらしもの好きで、当時一般に行われた自宅で産婆が取り上げる出産は好まなかった。すでに長男の忠幸もこの病院で生んでいる。

しかし、戸籍の届は三月三十日にした。早生まれにして一年早く学校に進めてやりたいという親心だったのだろうが、皮肉な結果になってしまう。これによって、長男の忠幸とは年齢では一つ違いということになった。この二人はずっと長く一つ違いのままに同じ学校で上がってゆくことになる。

そのころの住まいは東京の大森だが、まだ東京市には入る前の郡部だった。この年の九月一日に関東大震災を迎える。家の土の壁は落ち、瓦も数枚落ち、家も少しばかり曲がったようだが、幸いに倒壊はまぬかれ、火災にもあわなかった。母親は幼い二人の子を連れて、大森の一段高くなった丘の上に避難した。津波がくる恐れがあるということが誰からともなく伝えられたからである。それでも、その前にまず米を炊いてお結びをたくさんつくった。火を起こして米を炊くのだから、ずいぶん冷静なものだった。

当時はテレビはおろか。ラジオ放送もまだ行われていない時代だ。初めてラジオの音が流れるのは、その三年後のことだ。情報としては口コミしかないのだから、極めて不確実なことしかわからない。

今のようないま埋め立てはされていないから、丘に登るとすぐ近くは大森の海が見えた。ここは海苔などをとることで有名だったし、蟹料理の店もあった。丘の上の空き地には大勢の人々

が集まっていたが、海を見ている、一向に津波を心配はなさそうだ。しかし、安心はできない。それより二十数年前には、チリ地震によって津波が起こり、太平洋を横断して日本の三陸地方に大きな被害をもたらした。まだ忘れられないことだった。

そのうちに、父親が東京の銀座の会社から、東海道線伝いに歩いて帰ってきた。当時の言い方ならば、三里というところだろう。まだ、三十代半ばで若かった。皆が丘のほうにいるらしいということ合流できた。今よりは人口も少なく、ずつとのんびりしていた。母親のつくったお結びも、大いに役立った。

ホットしているところに、誰かが「朝鮮人がくるぞ」と声を出した。東京方面では、朝鮮人が大挙押しかけて、方々で乱暴をはたっているという情報である。ソレということ、若い男たちが駆り出され、父親も加えられた。やがて何事もなく帰ってくるのだが、一同不安に包まれる。情報手段がないというのは怖いものだ。これが全くのデマであったことは、後に判明するのだが、その十二年前に朝鮮を無理やり日本に併合してしまったが、大きな反発を受けていることをなんとなく日本人は感じていた。それがこうしたデマを呼んだ理由だろう。こんなデマが痛ましい犠牲者を出したことが分かるのは、ずつと後のことである。

大震災は、まだ生後半年したたっていない義也に分かるわけではないのだが、なんとなく、大きな災害が怖いということ、朝鮮人問題は記憶以前のところにひっかかっていたではないだろうか。成人してから、韓国・朝鮮問題は大いに気をかけるようになったのは、案外こんなところが潜在的にあったのかもしれない。

青山転居と信伯母さん

一家はやがて、東京の青山に引っ越した。母親の父母が、浦和でキリスト教会の牧師をしていたが、職を退いて、息子や娘たちのいる青山に引っ越してきたので、姉妹たちがその近所に越してきたこともあるだろう。また、子供た

ちの教育のことも考えていた。青山は今とは違い、東京市の西南のはずれで、静かな住宅地だった。

義也は丸顔の童顔で、いつもニコニコしている皆に愛される子だった。母親は近くにいる祖母のところにも、よく義也を連れて行った。祖母を中心に、左隣に母親の忠子、そして右隣には小学校にあがる前ぐらいの義也が笑みをたたえて、祖母に寄り添うように、少し体と首をS字に曲げている写真があるが、本当に無邪気で純真な幼年期の姿を、そのまま伝えている。

近くに母親の長姉が住んでいた。信伯母さんとよばれている。末っ子の母よりも歳は十六歳も上だが、生涯独身で同じオールドミスのミス・ウエルスと二人のお手伝いさんと一緒に暮らしていた。まだ女性は皆和服の時代に、もちろん洋服で家のなかでも靴をはき、すっかり西洋風だ。家の中では、英語をつかっている。ミス・ウエルスは何十年も日本に住んでいながら、日本語は下手だった。親戚一同はクリスマスをはじめ、何かというが集まってミス・ウエルスも一緒だった。幼い私の従兄弟は、長いこと信伯母さんは、ミス・ウエルスと同じアメリカ人だと思いついていたそうだ。

この信伯母さんが、しばらく義也を預かった。なぜか分からない。タテマエは義也の体が弱いから、滋養になるものを食べさせるなどいうものだったらしいが、とくに義也が弱かったということはない。小学校にあがってからだが、学校は伯母の家のほうが近くだから、ここから通えた。幼い義也にとっては、ちよっと外国に行ったような気分だったろう。今と違って、テレビもないし、外国に行くなどは夢の時代である。たまに外国に行って帰ってくると、洋行帰りなどとして特別扱いをされている時代だった。そんな時代の信伯母家は、まさに小アメリカという雰囲気だった。

この伯母は、後に従姉妹を養子にするのだが、皆にかわいがられた義也は次男でもあるし、信伯母の男の養子として狙われていたのかもしれない。兄弟が沢山いる時代だ。子供のない

家の養子になるというのはよくあることだった。そうすれば、学資も助かるというものだ。もしそんなことになれば、義也の人生は変わったことになっただろうが、確か、二、三ヶ月で元に戻った。でも、幼い時代の義也には、小さな外国に住むというのは、一種独特の体験であつたらう。

青山師範付属小学校

近くに青山師範学校があり、その付属小学校にすでに長男が前の年に入学していた。普通の公立小学校としては名門の青南小学校が近くにあつたが、両親は付属小学校を選んだ。ただし、この学校にはメンタルテストで振るいのかかった後に、くじ引きがある。二対一ぐらいの比率で落とされてしまうのだ。一応、公平性ということをうたっていたためだろう。忠幸、義也の二人は二年連続、これをパスした。

無理に早生まれにして一年繰り上げて入学した義也はチビのほうだった。成人してから平均以上の体格になったから、一年繰り上げて入学しなければ、体のコンプレックスはなくてすんだはずだ。もともと、母親は小さいが、父親は標準よりもずっと背の高いほうだった。長男の忠幸は小さいほうで、一年違いの義也もクラスでは小さかったから、田村兄弟はチビということにされてしまった。その四年後、私が同じ小学校に入ったが、体格は中ぐらいで、田村兄弟もやっとチビでなくなった。義也だって、一年遅れて入れば、標準以上だっただろうから、無理に繰り上げさせて入れるのはよし悪しいだった。

付属小学校では、担任の訓導は一年から六年まで一人が持ち上がりと言うのは原則だった。男女別に一クラスずつしかないから、組替えということはないから、同じクラスメイトが六年間一緒だ。男子だけは四年から別に二組として一学級を編成する。こんな制度だから、そのとき担任の先生が誰に当たるかが大きく運命を左右することになる。

長男の忠幸の時には、実直で生真面目な岡

本訓導だった。整理整頓をキチンとする躰が行き届いて、みな几帳面に育ったようだ。だが、義也のクラスの担任になった沼田訓導はこれとは対称的だった。付属小学校の訓導になるには、師範学校での成績もいいものが呼ばれたようだ。皆教頭まで上がると、決まって何処かの公立小学校の校長になって転出していった。だが、師範学校の成績と、教師としての適正は別なものである。

沼田訓導は自己顕示欲の強い人物だった。第二次大戦のなか、すべての政党を否定し、政府丸抱えの大政翼賛会と言う団体ができた。後のことだが、沼田訓導は教師を辞めて、この翼賛会の幹部になった。生徒の親に内務省の有力者がいたから、その関係でのし上がったのだろう。戦争中は羽振りの良い仕事だった。人を仕切るのが好きだったのだろう。だから小学校時代に「団長」という仇名がつけられていた。小学校の生徒でも案外に先生の本質をよく見抜いていたものだと思うのだが、本人もけっこうこの仇名にご機嫌だったようだ。

こういう人物に大事な六年間の教育を委ねたのだから大変だった。一介の安サラリーマンの息子など、沼田訓導にとっては何の利用価値もなく、無視されていたろう。それだけならまだよい。純真な義也は疑うことを知らなかったからひとつの事件を起こした。この沼田先生に、なんと義也が手紙をかいたのである。

純真に育てられた義也は、沼田先生がキリスト今日でないことが気になった。もちろんクラスにキリスト教などはまづいない。だが、先生にだけはキリスト教になつてもらいたかった。どうしたらよいか分からなかったが、小学校二年の時に先生に手紙を書いた。「先生もキリスト教になってください」という趣旨のたどたどしいものだった。これをどうするか思案した。付属小学校は師範学校から一年四回、教育実習の教生がくる。今のように短いものではなく、三月近く通常二人ずつくる。教室の一番後ろに、この教生用の小さな机が置いてあった。担任の訓導も簡単なものを置くのに利用して

いる。ここにそつと入れておけば、きつと先生がみてくれるに違いない。

幼い義也の純真で切なる願いは、翌朝見事に裏切られる。沼田訓導は、皆に義也の手紙を見せながら嘲るようにこういうのだ。

「田村君がこんな手紙をよこしたよ。僕はキリスト教なんか嫌いだから、なるわけないのにね」

義也は恥ずかしかった。自分の密かな願いが、こんなかたちで満座の前で辱められるとは思つてもみなかった。もちろん、沼田訓導がキリスト教が嫌いなら入らなくても仕方がない。もともとそういう人物ではないのだが、教師ならば、子供の切なる願いを満座の前で嘲笑の対象にするべきではないだろう。

当時は最も尊敬すべきものであるとされた先生のしうちに、幼い義也の心は深く深く傷つけられ、大きく曲げられた。それ以降、純真な義也の性格は懐疑的になり、尊敬すべきもの、権威的なものには批判的、反抗的になった。先生がこれでは、残りの長い小学校生活はあまり楽しくはなかったろう。弟にも少し意地悪にいった。武井武雄のお気に入り絵本をもつていたが、弟が見たがっても僕のものだからといって見せない。そんなことはなかったはずなのに。

夏になると、よく一家でひと夏を海岸の家を借りて海水浴と避暑で暮らしたものである。小学校三年生の時には沼津の御用邸近くの桃郷に行った。海岸ではよく漁師が地引網をしている。そこに加わって網をひくといくらか小魚を分けてくれる。これがけっこう楽しかった。地引網は朝早い。ある朝、家族で広い砂浜を散歩していると、濡れた浜辺で小さな鰯がピョンピョン跳ねている。この日は地引網はもう終わったあとだったが、こぼれた魚が、小さいから網の目ぬけてしまったのだろう。めいめいが六匹、五匹、三匹、二匹と拾った。義也は熱心に浜辺を回りなんと一人で十一匹も拾った。よいおかずが取れたと母親は喜んだ。家に帰って鰯は煮付けになった。いざ家族に平等に分けようとする、義也が大反対。十一匹とつたのは自

分なのだから、自分ひとりで十一匹食べるとい
って聞かないのだ。家族に平等にわけけるようい
と母親が説得しても駄目だった。

「義也はこんな子ではなかったはずなの
に」と母親は嘆いた。きつと学校での曲折した
気持ちがあんなところに表れたのだろう。だが、
反面教師という言い方もある。このような沼田
訓導は、義也のジャーナリストとしての批判精
神には案外にいい効果を及ぼしたのかもしれない。
そうでなければ、あまりにも純真で人を
信じやすく育つただろうから。

中学校へ進学

小学校から中学に上がるには試験がある。
この頃、東京の普通の受験なら、まず東京の府
立の中学を受け、そこで落ちたら私立中学にゆ
く。今とは逆だ。兄の忠幸はその前年、麻布中
学に入っていた。私立の仲では麻布、開成が名
門だった。義也は府立六中を受けて落第、麻布
を受けてこれも落ち、私立の二級も落ち、次々
と受けていったがどれも落ちた。入る所がみつ
からない。やつと無試験で生徒を募集していた
日本中学に入学した。明治天皇にもご進講した
という杉浦重鋼の創立の学校だし新宿にある
から地の利も悪くないが、どうしたことか受験
者が少なくなっていた。そこにやつと入れた。
徽章は八尺鏡そのまま大きく銀色に輝いてい
るものだ。皇道主義的な学校で義也には合わな
いだろう。ところが、一年の一学期には学年で
二番と言う成績だった。あまり、出来ない子が
多かったとはいえ、ずば抜けた成績だった。親
もこれを見て、二学期から転入試験を受けさせ
て麻布中学に入った。兄忠幸とは、小学校と同
じに、また一年違いで一緒に通うことになる。
兄忠幸にとつては、一年違いでずつとつい
てくる義也のことが、いつも追いかけてい
るようだった。忠幸五年の時に義也は中学四年
だ。四年になれば上級学校への受験資格があつ
た。模擬試験では同じ場に立たされる。それが
いやだったと語っている。

中学三年のときに、父幸太郎は立派な革表

紙の厚さ七センチもある新旧約聖書の豪華本
を義也に贈り、これを通読するように薦めた。
一年かけて通読し、その後褒美に、父親は義也
一人を連れて燕岳、常念岳を縦走した。本格的
な登山をまだしたことのない幸太郎は、もう五
十に近かったが一度挑戦して見たかったのだ
ろう。また、義也にとつても、その前に三原山
に行ったことがあつたが、本格的な登山で、こ
れを機会に山好きになったようだ。

中学時代の義也は、「家庭新聞」というも
のを発行し始めた。一九三八年十月十七日から
終戦後の一九四六年五月二十日まで、八〇〇号
あまりが発行された。戦争の兵役時代の休刊を
除くと、だいたい一年百号ほど、週に二回の割
合で発行したことになる。ある時には、毎日発
行ということもあつた。用紙は、父親の会社で
不要になった印刷物の裏面を使った。用紙費は
ただだ。もちろん手書き。「家庭新聞」という
ところだけは、木版で自分で作った。そんなこ
とは小学校の時から好きだった。こんなにやく版
などという印刷をしたこともあつた。今度もも
う少し本格的だ。

内容は、日常のなんでも入る。時局のもの
もある。小評論もある。すでに一人前のジャーナ
リスト気分だった。発行は随時。茶の間におい
てあるので、誰でも自由に読むことが出来る。
他の兄弟も見習って、それぞれが新聞のような
ものを出してみたが、どれも十号と続かない。
それを戦時中をのぞいて、敗戦後も八百号以上
続たというのは凄い。

二〇〇四年四月一二日